

すがのしター

あなたらしさにより添う看護

東京歯科大学
すがの訪問看護ステーション
電話 047-706-6500
FAX 047-706-5711
E-mail suganohoukan@tdc.ac.jp

「家で過ごしたい」「コロナ禍、面会ができないから退院する」、時には『家に帰れるのは今しかない』と主治医に後押しされ退院された利用者様。住み慣れた自宅で安心・安楽に療養し、その人らしく生活していただくために訪問しています。今回は、お別れ(看取り)をした利用者様をご紹介します。



男家族の中で揺れ動く思い

60代女性 夫と息子3人の5人家族 肝内胆管癌末期 通院・入院にて化学療法を継続するが「予後が短い」と告知され、緩和療法を希望し退院。週1回、介入を開始した。

介入当初、本人は「今は自分ができることはやりたい。人の手を借りたり酸素を付けるようになったら施設か病院へ入りたい。母親がホスピスに入っていた。もっと早く入れてあげればよかった」と話す。ADLは自立し身の回りのことはできていたが、疼痛や嘔気などが徐々に出現し臥床時間が長くなり始め、起き上がりやトイレへの移動に介助が必要となった。この頃、もう一度本人に思いを確認するが変わらず。その都度、家族へ本人の思いを伝達、家族は「不安はあるが自宅で看取りたい」と話す。

しかし、介入3か月頃、次第に病状が進行し在宅医から連日の訪問依頼があった。また、夫や次男より「吐気止めの座薬を入れるのに自分達では嫌がる。1日2回訪問してほしい」との希望があり、連日複数回訪問した。本人の羞恥心に気を配り、夫とケアを一緒にした。夫が口腔ケアや座薬の挿入ができるようになった。介入当初はあまり話さない家族であったが、状態が変化してからは夫だけでなく息子3人も訪問時にその場に居ることが多くなり、思いを話してくれた。一方、本人は「家が安心」と思いに変化が見え始め、訪問の度これからの経過について本人・家族に話した。

最期は、穏やかな顔で家族や親戚に見守られ息を引き取られる。エンゼルケア後、次男は「最期は穏やかに過ごせたと思う。本人が選んだ新居で看取れて良かった。」と笑顔だった。

本人・家族の「自宅で看取る不安」に訪問看護師は見守りつつ、予測される状態に準備して応じ、家族を労い介護負担の軽減に気を配りより添うことができた。しかし、本人の思いが揺れ動き変化した中での看取り、本人の思いが変わらなかつた時期に、本人と家族のすき間にもう一步踏み込んでいたら、自宅で過ごす本人の思いに少し早く安心感を与えることができたのではないかと思いが残ります。本人と家族、家族と医療者等ともにコミュニケーションが重要・不可欠であり、ここに積極的に関わる大切さを改めて感じた事例でした。

訪問看護師 小澤宏美

透析導入の選択

90歳代男性 末期腎不全 腎機能悪化に伴いシャントを造設

高齢でやや認知機能の低下があり、シャントが何か理解できていない。自宅のお気に入りのソファに座り、訪問すると「こんにちは。」と笑顔で迎えてくれた。しばらくすると腎機能がさらに悪化し、ついに透析導入の話がでた。

介入当初、透析はできるだけしたくないという思いを聞いていたため、本人と家族に思いを聞いた。医師から透析の話は聞いていたが、透析のメリット・デメリットは知らず、透析をする生活のイメージはなかった。食事はわずかししか食べないが、ステーキやグラタンなど好物を食べていた。水分摂取量も少ないため、浮腫も殆どなく穏やかな時間を過ごしていた。体力の低下に伴い、家族総出で準備をして家から出る状態だった。本人は詳しいことを理解していなかったが、週に何度も通って何時間も横になっている生活は嫌だと答えた。「ここにいるのが一番いいですね。」とソファをトントンと叩いた。家族は若い頃に本人の兄妹が透析をしている姿をみて、自分はやりたくないと言っていたことを教えてくれた。訪問診療医に透析のメリット・デメリットを説明してもらい、透析をしないことを選択した。

日に日に体力が低下していったが、息子がいつものソファになんとか移動させていた。家族がとても仲が良く、誕生日のお祝いに何が食べたいかよく話していた。「ステーキですかね。」と笑顔が忘れられない。その2週間後、誕生日を迎えA5ランクのステーキを少し食べ、数日後に家族が見守るなか旅立った。

透析をするかしないか、倫理的な問題であり、しっかり本人・家族の思いを聞き意思決定支援をすることが大切だと思った。今まで腎不全は苦しさ強い事例しか関わったことがなかったが、穏やかに最期を迎えられることも知った。

訪問看護師 渡辺明香

《 グリーフケア 》

お別れをして1か月が過ぎた頃、ご家族の思いを傾聴し介護を労うために、担当看護師と所長で訪問しています。次回号で報告します。